

町史編さんだより

第16回

『小さくてもまとまりの良さが自慢・小河内地区』

～「じげの宝」シリーズvol. 5～

『町史編さんだより』の16回目は、政治・行政・教育小委員会が、地域の特徴や活動、行事、祭り、昔話、自慢などを聞き取り、紹介する「じげの宝」をお送りします。

小河内地区にお住いの
世話役60〜70代の皆さんに話を伺いました。

昔の水路の絵図も発見

「小河内」の地名は、本町に配流された長谷部信連の郎党、小河内何某にちなむといわれ、古墳なども見つかっていることから、黒坂のまちより、もともと古くから小河内に人が住んでいたと思われる。布瀬谷入口には、乳岩大明神として信仰され、母乳の出ない母親が祈願を行った乳岩という乳房状の巨岩があります。



▲小河内集会所にある千手観音

また、集落西側の「湯の谷」からは湯がわき出していたため、近くにあった「薬師堂」は湯薬師と

称され、眼病に効くとして信仰されました。観音堂も併祀され、毎年行われる薬師さん、観音さんの祭りが今年も7月23日に行われ、多くの住民が集いました。

近年、小河内の水路の絵図や古文書が、鳥取県立博物館にあることが分かりました。鳥取県井手百選にも選ばれたこの水路は、黒坂の大庄屋が陳情して造ったもので、上菅の乗越橋付近の堰から、小河内内地、カワコ岩などを経て、黒坂城址、黒坂製鋼所跡（黒坂7区）あたりまで続いていたということです。作るのにも大変苦労し、特に岩だらけの場所は測量ができないので、ちょうちんをつるして、向いの岡集落から見ながら水平を出したとの話です。

農業で活性化

国道180号が日野川沿いに通過し、岸辺との間に水田が広がるほか、集落の山手にも段々上に田畑が形成されています。農業地域で、昭和60年代

以降、米のほか、白ネギの生産にも力を入れていきます。平成9年頃から5月〜12月の間、四季折々の朝採れ野菜を週二回ずつ米子、岡山の青果市場に出荷しています。

朝8時前に集荷場所に野菜を持ち寄り、青果市



▲地域で収穫した新鮮野菜を出荷

場から来た車に野菜を積み込んだ後は、茶飲み話に花が咲き、元気が湧いてくるそうです。また、乳牛100頭を飼育する日野町では唯一の酪農家もあります。

公民館活動もさかん

以前、子どもが多かったころは、毎年五月五日のこどもの日には地域ぐるみで子どもの成長を祝

うさまざまな催しを行っていました。平成の初めごろには、集会所で生け花教室を開いたり、ソフトボールクラブを結成しユニフォームをそろえるなど、コミュニティづくりも活発で、運動会や女性会、老人会活動も盛んに行われていました。

現在は14世帯と、少子高齢化が進みましたが、恒例の家族旅行、季節の



▲きずな深まる恒例の家族旅行

行事、荒神さん・薬師さんの祭りなどは、今もなお続けられています。集落の課題は、これからの世代交代とのこと。農業の指導に取り組む後継者もあり、地域づくりに期待が寄せられています。（松田暢子Ⅱ政治・行政・教育小委員会）

国登録有形文化財に

国の文化審議会が7月21日、佐々木家住宅（舟場）など県内6カ所15件を国登録有形文化財にするよう、文部科学省に答申。今後、国登録有形文化財に登録される見込みとなりました。



床の間、床脇、付書院を備えた上質な座敷「新座敷」。
日本海の荒波と潮止めの松を模した欄間彫刻（富次精斉作）が目を引き



大黒柱を本来の位置からずらす技法「逃げ」

当時の技法を現代に伝える
古民家 沙々樹

佐々木家住宅は、江戸時代後期に庄屋の住居として建てられた主屋をはじめ、新座敷、穀蔵、新蔵があります。主屋では、床の間の意匠や差鴨居などに江戸時代の面影を残しているほか、居室に畳を敷きやすいように大黒柱の中心を土間側に移動させた「逃げ」の技法が特徴としてあげられます。

11代目当主の佐々木彬夫さんは「地域の宝として活用策を充実させたい」と話します。180年以上経ちながらもなお良好な状況を保つ建物を生かし、佐々木さんはワークショッパやコンサートなどを開くなど、体験型の古民家「沙々樹」として活用しています。

今後も積み重ねてきた歴史や風情を後世に伝える重要な場所としてより一層の期待が高まります。

セルプひの林原さん

仲間の声援受け
3位に輝く！

第37回全日本トライアスロン皆生大会
男子年代別の部35〜39歳



「ここまで頑張れたのは、仲間や地域の皆さんの応援があったから。感謝の気持ちでいっぱいです」。そう話すのは、セルプひの（社会福祉法人祥和会）所長の林原正彦さん。
7月16日、米子市で開かれた第37回全日本トライアスロン皆生大会で、林原さんが男子年代別の部で第3位（総合24位）の好成績を収めました。トライアスロンは、スイム3km、バイク（自転車）140km、ラン42・195kmを走るレース。特に、皆生大会は「日本におけるトライア



大会でも好評だったセルプひの大応援団

スロン発祥の地」としても知られる伝統ある大会です。林原さんは、日中はセルプひでの勤務しながら、4月〜6月までのシーズン中は毎朝早く起床。ランニングや自転車などのトレーニングを欠かさず続けてきました。

また、大会当日の朝早くから応援に駆け付けてくれたセルプひののスタッフをはじめ、地域の人への感謝も忘れていません。「常に前の自分を超えていきたい」という気持ちを持ち続けることが大事」と林原さん。これからも挑戦は続きます。